

ふるさと見て歩き

第25回

平山橋今昔



▲春の平山橋

盛金地区には市内でも数少ない沈下橋——平山橋——が架けられています。今も地元住民の大切な交通路として活躍しているこの橋についてご紹介します。

◇舟渡しと共存——江戸時代

現在平山橋の架けられているところは、「平山の渡し」という船の渡し場でした。江戸時代後期の水戸藩の役人で、県北地域について詳細な記録を残している加藤寛斎によれば、舟生から家和楽、盛金に至る道は急な峠道で転落者やけが人を度々出して通行人を悩ませていたようです。特に久慈川西岸にある盛金山は有名な難所で「峯ヨリ下ノ久慈川エ落死スルモノ多シ」と記録されています。柵を設けても滑落する人が絶えなかったため、盛金山を越えなくても済むような道を作ることが

考えられました。まず舟で久慈川の東の対岸に渡り、山の根伝いに北上する道を作ったのです。この道は安政二年の春に開通したことから「安政新道」と呼ばれました。その後、山方地域を南北に縦断する南郷街道は、明治二十八年に県道になりました。平山橋が架けられてからは、川沿いの道（現在の国道118号線）を安全に通れるようになったのです。

◇度々の流失

平山の渡しに橋が架けられたのは大正期のことといわれています。現在でも欄干は膝の高さほどしかなく、水面からの高さは二・五メートルほどです。地元の人からは「地獄橋」の愛称で親しまれています。沈下橋は増水のときに流されにくくするため、わざと水がかぶるように低く作られています。抵抗を少なくすることで橋自体が壊れるのを防ぐように作られているのです。また、簡単な構造にすることで、破壊されても修復しやすくする利点もあります。とはいえ、安全性については度々協議されており、そのためコンクリートや鉄による補強がなされ、今日では木材の部分は欄干のみになっています。くわえて橋の上流側には流木や土砂の衝撃を除けるために斜めに鉄柱が設置されています。「チリ除け」と呼ばれるもので昭和四十年の設置当初は、払い下げになった国鉄のレールとコンクリートで作られていました。

もともと、昭和初期の平山橋は幅五十センチメートルほどの板を並べただけの簡単な板橋でした。橋はあつても度々流されたため常に渡船が営業していました。船頭は米や麦などを渡し賃として得ると同時に下小川村からも補助を受ける形で営業していたといえます。下小川村の役場や学校、水郡線の下小川駅などが久慈川の西岸に集中していたため、平山橋は川東地区の人々の重要な足となっていました。そのため橋が流失すると平山地区を始めとする周辺五地区が交代で修理にあたっていました。その後昭和三十五年十月には角材で組んだ木橋が作られます。しかし二年後には流され、昭和四十年に鉄筋コンクリートの橋が架けられました。このとき、前記のチリ除けも設置されました。その橋も流失し、昭和五十八年に現在の橋が架けられました。

昭和二十年代には三年に一度くらいだった増水が昭和五十年代には二年に一度ほどになり、ここ二十年ではほぼ年に一度は起こると古者は語ります。雨が降り出すと一時間から二時間でみるみるうちに増水するようになつたそうです。道路や側溝の舗装が進んだこと、森林の伐採により山が浅くなったことで土地の貯水効率が悪くなったことが原因でしょう。



▲「北郡里程間数之記」に描かれた平山付近

ふるさとを象徴する地獄橋の景色も、環境の影響に大きく左右されてしまっています。

※菊池昇氏に聞取り調査に御協力いただきました。

（歴史民俗資料館）